

## 修学旅行の風呂場で、全裸の女子一人を大勢の男子たちが取り囲む

夕方 16 時ごろ、5 台の大型バスが旅館へ到着した。

修学旅行の一行を乗せたバスは、予定通りの時間に、旅館に到着した。

K 県 T 中学校の 3 年生が旅館へと入っていく。生徒数は 200 人ほど。

40 人学級が 5 クラス。

男女はちょうど半々くらいだ。

「よーし。これから旅館に入っていくけど、旅館の方に迷惑にならないように行動するようにー」

と学年主任の男の教師がバスから降りた 3 年生全員に拡声器を使って声をかけた。

「唯香ちゃん、大丈夫」

4 組の学級委員である的山咲良(仮名)が甲田唯香(仮名)に声をかける。

的山は甲田の背中をさすってあげている。

実は 4 組が乗っていたバスの車内で、甲田唯香がバス酔いで嘔吐してしまっていた。

エチケット袋で受け止めたため、匂いは最小限に抑えられていたけど、4 組の生徒たちは、ようやくバスの外に出れて、やれやれという感じで新鮮な空気を吸っている。

他の生徒がそんな状態の中、学級委員の的山咲良だけは、甲斐甲斐しく甲田のことを気遣っていた。

的山咲良はテニス部に所属していて、テニス部でも部長、クラスでは学級委員を3年連続で務めている。

頭もよく、いつもクラスの中心にいるようなタイプだった。

甲田唯香は大人しく、身体の小さな女子で、体育をよく見学していた。

旅館の中に入っていく、ロビーで旅館の従業員たちに出迎えられた。

「よーし、じゃあ、この後の予定を確認しておくぞー」と学年主任の教師が拡声器は使わずに大きな声で全体に声をかける。

この旅館はそれほど大きい旅館ではなく、3階建ての、こじんまりとした旅館だった。

この日は、T中学の中学生たちの貸し切りだった。

1階はロビーや食堂などがあり、2階が男子たちの部屋、そして3階は女子たちの部屋だった。

学年主任の教師が、この後の流れを説明する。

この旅館は大浴場が1カ所しかない。

そのため、男と女で、時間帯を区切って、大浴場を使うことになっている。

まず女子が大浴場に入る予定で、男子が後から入ることになっていた。

これは、学校側が決めたのではなく、旅館側の決まりだった。

女性の入浴時間が、18:00～19:30。

そして、30 分の入れ替えと清掃の時間の後、

男性の入浴時間が 20:00～21:30 だった。

この旅館の決まりにならい、入浴時間が告げられた。

全クラスの生徒がいっせいに大浴場に行くと、混雑するので、1 組から 3 組が入浴時間の前半で、4 組と 5 組は入浴時間の後半で入るように言われた。

的山咲良たち 4 組の女子は、女子の時間の後半なので、だいたい 18:45～19:30 の間に入浴をすることになる。

女子たちは入浴の後、食事をとる。

男子たちは、入浴の前に食事をとる。

修学旅行のしおりにも、書かれてあることを、教師は念のための確認した。

現在の時刻は 16:30。

これから一旦それぞれの部屋へと入り、女子は入浴の時間まで、男子は食事の時間までは部屋での自由時間となる。

「先生。唯香ちゃんはどうしましょう」と的山咲良が 4 組の担任の高田に声をかける。

高田はまだ 20 代前半の若い女の先生だ。

修学旅行の引率をするのは、今回が初めてだった。

「そうねえ。甲田さん。医務室に行く？それとも、とりあえずみんなと一緒に部屋でゆっくりする？」

高田がそう甲田に声をかける。

甲田はバスの車内で吐いた後は、吐いたことがよかったのか、いくぶん気分は楽になってきていた。

「部屋にいきます」と甲田は答えた。

「ほんとに大丈夫？」と的山が心配そうに甲田の顔をのぞき込みながら言う。

「うん、少しは楽になったから、大丈夫。ありがとう」と甲田が的山に感謝を述べた。

甲田も皆と同じように部屋に行く。

荷物が重いので、的山が甲田の荷物を持ってあげていた。

自分の荷物もあるのに、本当に的山が気が利く、やさしい学級委員だった。

部屋は5人ずつの部屋だ。

的山と甲田は同じ部屋だった。

部屋に到着した後、甲田以外の4人は、旅館の部屋で楽し気におしゃべりに興じている。

でも、甲田はやはりまだ体調がすぐれないのか、話には入ってこず、顔色が悪そうだった。

「唯香ちゃん。ほんとに大丈夫？」と的山が声をかける。

「ごめん。やっぱりしんどいかも」と甲田が小さく答えた。

「医務室行こっか。その方がいいと思うよ」

「うん」と甲田が答え、的山が付き添って、医務

室に行くことになった。

医務室は 1 階にある。

的山は入浴時間になるまで医務室で甲田に付き添ってあげるつもりだった。

だから、風呂にいくときに持っていく手提げ袋を持って出た。

甲田の分の手提げ袋も一緒に持って出てあげていた。

時刻は、17 時過ぎだった。

医務室で休んだ後、もし、甲田も一緒に風呂に入れる状態なら、そのまま 1 階にある大浴場に一緒に行こうと思っていたからだ。

1 階と 3 階を何度も行き来するのは大変で負担があるだろうからと、的山が気をきかせたのだった。

1 階の医務室に着くと、甲田は備え付けてあるベッドに横たわった。

「的山さんは、もうみんなのそこ戻ってくれていいよ。ありがとう」と甲田が的山に言う。

「ううん、いいの。先生もきてないし、もうちょっと私ここに残ってるから。唯香ちゃんはゆっくり休んで」

的山がそう言った。

教師たちは、旅館の人との打ち合わせや確認作業に追われていたので、医務室には誰も来ていない。

旅館の医務室に医者のような人がいるわけで

もなく、ただ休むためのベッドがあるだけなので、2 人以外に誰もいない。

甲田唯香一人をここに残しておくわけにもいかなかったなので、的山は医務室にしばらく残ることにした。

甲田はそんな的山に感謝しつつ、安心して目を閉じた。

その間、教師たちはかなりバタバタしていた。その理由は、旅館の入浴の時間が変更になっていたことが判明したからだ。

「すみません。今日 1 日ですよ」と旅館の支配人が教師たちに説明を始める。

「今日から、実は入浴の時間が変わっておりまして」と説明を続ける。

入浴の時間が少し早まったようだった。

今日は月初めの 1 日で、今日からの変更ということで、事前の打ち合わせと違う入浴時間だった。

新しい入浴時間では、女性が 17:00～18:30、30 分の交代時間と清掃があり、男性が 19:00～20:30 ということだった。

修学旅行生はこの時間をさらにクラスごとに前半と後半に分けているので、その入浴時間を生徒たちに知らせる必要があった。

それに女子の前半の方は、もう入浴時間になっているので、急いで行かないといけなかった。

生徒たちは自分たちの部屋に入っていたので、そのことを知らせるために教師がいちいち部